八千代の戦跡を偲ぶ

機友の執念 屠龍発掘

「八千代の歴史と文化」のこしたいものつたえたいもの ⑥

監修 小林 弘治
絵 小出 忠美

「国をうずめた日の丸の　歓呼の中に羽ばたいて　わがニッポンはまっしぐら　6万キロの空を飛ぶ　空を飛ぶ」…これは昭和14年8月26日、八試特偵を母体とした純日本式大型双発飛行機「ニッポン号」が、世界一周、36か国を歴訪し、親善を深めようと飛び立ち、二ケ月後の10月20日に、無事帰還した壮挙を讃えた歌です。

翌年の昭和15年は紀元二千六百年を祝う行事が全国で催されました。しかし、この後、日本は戦争の泥沼へと落ちて行くのです。

昭和16年12月8日の真珠湾攻撃で、太平洋戦争に突入した日本は、はじめは東南アジアの欧米植民地攻略など戦果をあげましたが、次第に戦況は悪化して行きます。

日本本土爆撃を本格化させた米軍は、昭和20年1月27日東京の中島飛行機武蔵製作所を爆撃しました。このB29の編隊に対し、果敢な体当たり攻撃を行った戦闘機がありました。

空冷複列星型14気筒エンジン搭載、最大速度時速547km実用上昇限度1万m 川崎航空機製、二式複座戦闘機キ45改「屠龍」は本土防空戦でB29攻撃に威力を発揮していました。

水戸陸軍飛行場を発進した屠龍は、午後一時過ぎ、船橋上空でB29の編隊を捕捉、37ミリ機関砲による前方攻撃に次いで、反転、B29の後方より覚悟の体当り攻撃を敢行したのです。

この攻撃でB29は、酒々井伊篠に墜落、屠龍も火を噴き、このままでは民家を直撃かと思われたその時、屠龍は最後の力を振り絞るように、急旋回で回避、睦村神久保の水田に激突、小林雄一軍曹と鯉渕夏夫兵長は戦死、帰らぬ人となったのです。

軍によって機体の一部と鯉渕兵長の遺体は収容されましたが、小林雄一軍曹と、残る機体は地中深く残されたままでした。

そして、昭和20年8月、広島、長崎への原爆投下。日本はポツダム宣言受諾、無条件降伏することになります。

敗戦の混乱の中で、小林雄一軍曹と屠龍は忘れ去られていました。否、少飛10期の機友の地道な調査活動は続けられていたのです。

昭和55年に神久保の現場を確認、発掘の陳情を行いますが、その願いが実現したのは、平成8年9月19日でした。51年もの永い間、地中深く眠っていた小林軍曹の遺骨は、日の丸がはっきりと判る機体とともに収容されました。

少飛10期の機友たちの戦争がやっと終わったのです。

体当りせし人　二十と十八
聞きてむね打つ　老残のわれ
五十年を泥に埋まりし
なきがらよ
魂目覚めつつ　何見給うや

――戦友の詠める歌より――